

第四十一回 「全日本中学生水の作文コンクール」 岐阜県優秀作文集

水について考える

主催 水循環政策本部、国土交通省、岐阜県

後援 文部科学省、厚生労働省、農林水産省、

経済産業省、環境省、

独立行政法人水資源機構、

水の週間実行委員会、全日本中学校長会

「全日本中学生水の作文コンクール」について

「全日本中学生水の作文コンクール」は、次代を担う中学生の皆さんに、暮らしの中で体験している水にまつわる話や、祖父母、両親、先生から学び聞いた話などをもとに、「水」や「今後の水の使い方」について、考えていただくという趣旨で、水の日・水の週間の行事の一環として実施しています。

今年、第四十一回を迎え、岐阜県表彰として最優秀賞一作品、優秀賞二作品を選定しました。

この三作品について、このたび優秀作文集としてとりまとめました。いずれも中学生の皆さんの真剣な思いが伝わってくる作品です。ぜひ御一読ください。

「第四十一回全日本中学生水の作文コンクール」

一. 応募要領

- ① テーマ 「水について考える」（題名は自由）
- ② 対象 中学生（中学生と同じ学齢の者を含む。）
- ③ 原稿 四百字詰め原稿用紙四枚以内で日本語により表記されたもの
岐阜県都市建築部水資源課（岐阜県内の応募者）
- ④ あて先 令和元年五月七日（到着分有効）
- ⑤ 募集締切日
・ 応募作品は個人作品に限る。
・ 応募作品の著作権は国土交通省及び岐阜県に帰属する。
・ 応募作品は返却しない。
- ⑥ 著作権等

二. 応募状況 応募学校数 三校 応募総数 四十八作品（一年…一作品、二年…四十五作品、三年…二作品）

三. 審査

審査 応募作品を岐阜県で審査（地方審査）し、五作品を中央審査対象作文として国土交通省に推薦。中央審査において入選以上の者を除き、岐阜県表彰受賞者を選定しました。

目次

岐阜県表彰

【最優秀賞】

『未来へく大切な資源く』

多治見西高等学校附属中学校 二年 日比野 紗英

【優秀賞】

『私にできること』

多治見西高等学校附属中学校 二年 石田 陽向子

『金魚が水道水を守るく東京二〇二〇に向けてく』

多治見西高等学校附属中学校 二年 高橋 乙歌

『未来へく大切な資源』

多治見西高等学校附属中学校 二年 日比野 紗英

私の家では幼いころから年に一度、キャンプに行くのが毎年の恒例です。炭をおこして焼くバーベキューの味は格別です。また、朝ご飯に母と作る味噌汁の味も最高なのです。

普段の生活の中で、何気なく使っている水。あまりにも当たり前すぎてこの便利な生活の中で、水の大切さを改めて考えることはあまりありません。しかし大自然の中であえて不便な生活を楽しむ数日間には私に色々なことを教えてくれます。星空の美しさ、朝の空気の冷たさ、川のせせらぎの音……。水を大切にすることのもそのうちの一つです。

キッチンの水道の蛇口をひねると水が出る。汗をかいたらシャワーをあびる。それは当たり前前の日常です。しかし、キャンプ場では少し事情が違います。

辺りが明るくなり、鳥のさえずりを聞きながら一日が始まります。朝ご飯を作るために大きめのポリタンクに水をいっぱい汲んで運ぶのが私と妹たちのいつもの仕事です。少し離れた水場から水をいっぱい入れた重いポリタンクを運ぶのはとても大変です。しかし、最高の朝ごはんにたどりつくには、重要な任務なのです。

そうやって汲んできた水で家族そろっての朝ごはん作りが始まります。米をとぐ、ご飯を炊く、野菜を洗う、味噌汁を作る……。ほとんどの作業に水が必要です。ポリタンクの中の水がどんどんなくなる、また汲みに行かなければならないので、無駄遣いは厳禁です。最小限の水で料理し、最高の朝ご飯を作るのです。正直、めんどうくさいと思うこともあります。でもこうやって苦労して、水のありがたさを感じながらいただく朝ごはんは最高に美味しいのです。

水の惑星と呼ばれている私たちの美しい地球。その地球にある水のうち、人間が使用できる水の量はわずか〇・〇一パーセントだそうです。その水を世界中のみんなに分け合っているのです。しかしその水を世界中のみんなに分け合っているのです。しかし人口増加に伴い、水不足は加速しています。地表に降り注ぐ雨や雪などによって、絶えず補給されているのでは、と思っていました。近年問題となっている地球温暖化の影響で、世界的に雨量に変化があり、毎年のように水不足が各地で起こっています。また、海外では、安全な水を得ることができない人が十二億人、また汚れた水が原因で病気になる死んでしまう子供が八秒に一人いるといわれています。以前テレビでも見たことがあります。わたしたちと同じくらいの子供達が家から何キロも離れた水場まで水を汲みに行くのを知り、驚いたことがあります。彼らは生きるために水を毎日汲みに行き、大切に使っていました。もちろん学校へ行くこともできません。

また、清浄な水が手に入らない国では、小さな赤ちゃんが感染症になり命を落とすというシーンをみました。そういう国が早く無くなつて、世界中で安全な水が使えるようになるように願わずにはいられません。そのような現状を知り、心が痛くなると同時に今私たちにできることは、少しでもこの事実を心に置き、限られた資源を未来のために守っていくこと。資源は無限ではないことを忘れずに、大切に使うこと。それを一人一人が心がけることで、未来になにか大切なものが残せるのではないかと思います。

『私にできること』

多治見西高等学校附属中学校 二年 石田 陽向子

「ホタル、だいぶ減ったなあ。」昨年の夏、ホタルが飛ぶ夜空を見上げて、祖父は少し寂しそうにつぶやきました。私の家では、毎年夏に祖母の家に行き、ホタルを見ることが恒例行事です。いとこたちと一緒に軽トラックの後ろに乗ってホタルをながめたり、手に乗せたりして楽しめます。今年もそうでしたが、祖母によるとホタルは昔の方がたくさんいたそうなのです。目の前を飛ぶたくさんのホタルは、少ないようには見えません。

私は、ホタルは本当に減っているのだろうか？と疑問に思い、調べてみました。

日本でみられるのはゲンジボタルとヘイケボタルです。特にゲンジボタルはものすごい勢いで減少しており、五十年後には六十四パーセント以上の確率で絶滅してしまうと考えられています。これでは私がおばあちゃんになる頃には、もうホタルがいなくなってしまうのではなにか、と私は驚いたし悲しくなりました。ホタルが減っていることは、なんとなくしか知らなかったのですが、まさかあと数十年で絶滅する恐れがあるほどだったとは思いませんでした。ホタルはどうしてこんなに減ってしまったのでしょうか。調べると本当にたくさんの理由がありました。代表的なものは農薬使用、家庭・工場からの排水による水質汚濁、ホタルの食物となる水生生物の駆除や河川の工事などです。その他にも光害や乱獲などがありました。光害とは、人間がホタルの発生域で車のライトなど強い光をつけることでホタルに悪影響をあたえることです。私は、ホタルを見るときに車のヘッドライトをつけたりしてホタルが寄ってくるようにしていました。光害について知って反省し、今後はそんなことしないと決めました。ですがやはり、大きな原因は水質汚濁です。たとえば農薬を田んぼで使うと水中で暮ら

すホタルの幼虫に影響を与えます。日本は一時期、多くの農家が農薬が自然によくないということを知らず大量の農薬を使っていました。私の母は「そのころからタガメとかゲンゴロウとか、水中生物がすごく減ったんだよ。ホタルもね。」と言っていました。ホタルは減る以前は、ほうきを振り回すとそれにびっしりとくっつくくらいたくさんいたらしいです。でも去年はあみをふり回してやっと三、四匹とれるくらいだったので、おばあちゃんの家でもホタルは減ったのだなど思いました。大量の農薬が使用された時期もありましたが、その後は人々が農薬について理解を深めていき、農薬を必要以上に使うことは減りました。そのおかげで生き物たちも少しずつ姿を見せるようになりました。浄水場などの施設も自然への配慮を考えるようになっていきます。しかし、実際のところホタル復活はあまり進展していません。ホタル復活を謳いながらも、ただホタルの幼虫を放流するだけ、というケースも少なくありません。農薬の使用量は減ったものの、水質汚濁はひどくなる一方で、田んぼや河川は決して生き物の住みやすい場所になっていません。私たちが水を汚していけば、ホタルを含む多くの生物に打撃をあたえます。生き物だけでなく、水を利用する人間にも影響があります。水は限りある資源です。生き物は私たちと同じ地球の一員です。ほどよいバランスを保ちながら大切にしていけるとよいと思います。

水質汚濁を止めるために私たちにできることといっても、大してありません。工場排水や土木工事による汚染は止めようがないからですが、家庭排水を減らしたり、ゴミを捨ったりすることが自分です。学校近くの川にゴミがたくさんあるので掃除に行こうと思っ

ているところですが、ホタルの飛びかうあの美しい光景を、この先もみられるように、私にできることをやっていきたいです。きっと無駄にはならないと思うから。

『金魚が水道水を守る（東京二〇二〇に向けて）』

多治見西高等学校附属中学校 二年 高橋 乙歌

赤、白、オレンジ、色とりどりの金魚が優雅に泳いでいる。この金魚達は私が小学生の頃、兄妹といっしょに夏祭りの金魚すくいであったものだ。金魚を飼い始めてからは、エサや水そのの水などいろいろなことに注意して育てていました。金魚は、水の変化を感じ取りやすい性質を持っているので、水換も忘れずに行いました。今では、産卵して、飼いはじめた時よりも倍の金魚がいます。

飼育や観賞魚として人気の高い金魚。その美しい姿は日本だけでなく世界中で人気があります。

さて、ある日私は、こんな記事を見つけました。それは、『水道水の安全を守る金魚』というものです。

私たちが日常生活で使う水道水は、川や湖から取りこんだ水や地下水などを浄水場で浄化・消毒して作られています。この時、水の中に水銀などの重金属や農薬といった、人間の体に害を及ぼす物質が含まれていないか、検査をする必要があるのです。それに、きたる、二〇二〇年には東京オリンピック・パラリンピックが開催します。東京五輪で、都内の観光地や公共施設などでテロが発生するかもしれません。特に水道関連の施設でのテロ行為は、都民全体の生活に直結してしまうため、万全の対策をする必要があります。この対策に金魚が使われているのです。これは「バイオアッセイ」と呼ばれる、世界規模で採用されている科学的方法です。具体的には、浄水場で取り入れる水で、金魚を飼育し、毒物に反応して金魚が異常な動きをした際には、検査を行うというものです。

私は、この記事を見たとき、金魚は飼育や鑑賞のイメージでしかなかったもので、すごく驚きました。それと同時に、なぜ金魚なのだろう、他の魚でもできるのではないか、など疑問に思いました。

金魚を使用するのは、水の変化を感じやすい性質を持っているため。また、飼育のしやすさや生命力の強さから、二十四時間三百六十五日連続して監視するのに向いているからです。また、全国の浄水場では、金魚以外にも様々な生き物が水の監視に使われているそうです。魚では、ヒメダカ、ニジマス、コイ、フナなど。ここ最近では、イガイという貝の殻の開き方を見て、水の中に毒物が含まれていないか確認するところもあるそうです。

私は、金魚以外にもコイやメダカなどが水道水の安全のため、テロ対策のために日々力を貸してくれていることを知り、身近な生き物が私たちの生活を支えてくれたことに感動しました。

この事に、私は興味を持ったので、次に歴史について調べてみました。まず驚いたことは、なんと、江戸時代、金魚はお殿様の毒味役をしていたのです。時代劇の一場面で、水そうにお殿様のご飯を入れると金魚がブカーッと浮かび上がり「曲者！」というシーンは、昔、本当にあった事だったのです。それから四百年後の今、金魚は私たちの毒味役をしています。この不思議な縁を私たちは大切にしていきたいですね。

浄水場やバイオアッセイについて知る機会がなければ、生き物が水道水を守っていることを知ることができなかったかもしれません。これからは、水道水を守る生き物にも感謝しながら水道水を使いたいです。